

## 会員の広場



### 老人六歌仙と仙厓和尚

栗林直幸（東京）

#### 老人六歌仙

3年ほど前だったか、ある飲み会で友人から「老人六歌仙」なる書を見せられた。高齢者には一言一句が身に覚えのあるもので、で一同いたく感心したものであった。書には仙厓和尚とあり、以来この人物の魅力に惹かれ

ている。

すでにご存じの方もおられると思うが、まず老人六歌仙を以下に記してみたい。

○しわがよる　ほくろがでける　腰曲がる  
頭は禿げる　ひげ白くなる

○手は振れる（震える）　足はよろつく　歯は抜ける　耳は聞こえず　目はうとく（視力低下）なる

○身に添う（付ける）は頭巾　襟巻　杖  
眼鏡　たんぼ（湯たんぼ）　温石（おんじやく）  
しびん　孫の手

○聞きたがる　死にとむながる（怖がる）  
淋しがる　心は曲がる（ひねくれ）　欲深くなる

○くどくなる　気短かになる　愚痴になる

出しゃばりたがる　世話やきたがる

○又しても同じ話に　子を誉める　達者自慢に人は嫌がる

#### 仙厓和尚なる人物

仙厓和尚（仙厓義梵）は1750（寛延3）年に美濃に生まれ、保土ヶ谷の東輝庵で修業の後に諸国行脚、39歳で博多・聖福寺の住職となる。62歳で引退し、以後、寺院内で隠棲生活を送り、1837年に88歳で生涯を閉じた。「東の良寛、西の仙厓」と言われた江戸中期から後期にかけての臨済宗の名僧である。堀和久著『死にとうない 仙厓和尚伝』（新人物文庫、新潮文庫）によると、仙厓の臨終の言葉は「ほんまに死にとうないのう」だったそう、名僧の含蓄ある言葉である。

#### 出光佐三と仙厓

出光興産の創業者出光佐三は福岡出身でもあり、終生仙厓の書画を収集し、その数は千点を超える。余談であるが、目下ベストセラ―の佐三の伝記小説『海賊とよばれた男』の中にも仙厓の書画収集のことがたびたび出てくる。収集された書画はすべて出光美術館に所蔵されており、今年の仙厓展は9月21日から11月4日までの開催が予定されている。

#### 仙厓と聖福寺

仙厓が住職を務めた聖福寺は福岡市内にあり、国の史跡に指定された広大かつ緑豊かな禅寺である。仙厓の墓もここにあり、皆様も福岡に行く機会あればぜひ訪れることをお勧めしたい。